

文 化

どの街にも豊かな歴史と文化がある。だが実際にはあまり知られず、宝の持ち腐れとなっていることが多い。我が街の価値や魅力を知れば人々は地元への愛着心を育て、元気になるはずだ。――

そう考え、街の様々なエピソードをひとつの物語に仕立てて、語りと映像と音楽でつづる舞台公演を1994年から関西で続けている。名付けて「語りベシアター」。

街の生い立ちや地域で活躍した人物、文学作品、ものづくりなど多角的な視点からシナリオを書き起こし、自らナレーターを務める。古い懐かしい写真やイラストによる「電気紙芝居」で視覚に訴え、寸劇も交える。舞台を盛り上げるのはプロの楽師による生演奏。

地元に興味が無い人、歴史や文化を堅苦しいと感じる人に、いかに五感で楽しんでもらうかがカギ。とはいえ単なるエンターテインメントではなく、街の本質を理解してもらうことが不可欠だ。

これまでにも多彩なシナリオを



昨年末、兵庫県尼崎市の市制100周年記念イベントで上演された「語りベシアター」の様

ち尼崎ものがたり アマにしかない歴史と技術と都市文化」を披露した。

◆ ◆ ◆

自ら歌って殻を破る

この語りベシアターは大阪ガスの研究機関、エネルギー・文化研究所が行っている独自の研究発信の1つ。都市文化や街の魅力を創出を専門とする研究者として、活動に取り組んで28年がたつ。

入社して商品開発・企

調で」と指示されたもの

◆ ◆ ◆

栗本 智代

この語りベシアターは所長と立ちあげたのがこの活動だ。当時の経済一辺倒、文化軽視の風潮に行っている独自の研究発信のもの、大阪人に地元を再発見してもらう。そんな初舞台を1から制作する大役を任せられた。

所長から「語りは講談



の若者には響かないと考え、ミュージカル風にして自ら歌った。2作目からアンサンブルの生演奏も加えた。母から「女は目立つな」といわれてきたが、スポットライトを浴びて語ることで自らの殻を破ることができた。

一方、大阪についてまだまだ知らないことも多い。街のフィールドワークを重ね、歴史や今の動きを勉強した。

◆ ◆ ◆

シナリオは一人で執筆98年からは活動を一手に引き継いだ。当初は依頼に依って、自治体や民間団体の記念事業や勉強会などで不定期で披露していた。2007年ごろから新聞社や自治体、商工会議所などと共催する自主公演が加わり、今は年に数回、舞台に立っている。

シナリオは図書館やネットで調べたり、自治体や郷土史家に相談したり、基本的に1人でリサーチを重ねて執筆する。この土地はどんな景色を眺めてきたのか。住民の

心に響くエピソードは。真由美さん、バイオリニストの西村恵一さんとの共同作業。2人とチームを組んで20年が過ぎた。担い手の育成も進む。

昨年度は2期生15人が集まり、今春に発表会を開いた。50代から80代まで男女の区別なく、生き生きと取り組んでいる。

ただし公演がゴールではない。多くの人に地元の価値や魅力を再発見してもらい、次の一歩を一緒に踏み出すことだ。今後は言い換えるなど注意こそし、現代的な視点を重ね合わせて、街を再起動させる一翼を担いたい。

(くりもと・ともより)大阪ガスエネルギー・文化研究所 所長(研究員)

制作、上演してきた。「曾根崎心中考」「大阪モダンズム物語」「神戸・居留地ものがたり」など。多くは40分程度だが、1回の公演で2本上演することも多い。

昨年末には兵庫県尼崎市の市制100周年記念イベントで新作「わがま

あなたの街を物語る

◆関西各地の歴史や文化、舞台に仕立てて地元愛育む◆

制作、上演してきた。「曾根崎心中考」「大阪モダンズム物語」「神戸・居留地ものがたり」など。多くは40分程度だが、1回の公演で2本上演することも多い。

昨年末には兵庫県尼崎市の市制100周年記念イベントで新作「わがま

の若者には響かないと考え、ミュージカル風にして自ら歌った。2作目からアンサンブルの生演奏も加えた。母から「女は目立つな」といわれてきたが、スポットライトを浴びて語ることで自らの殻を破ることができた。

一方、大阪についてまだまだ知らないことも多い。街のフィールドワークを重ね、歴史や今の動きを勉強した。

◆ ◆ ◆

シナリオは一人で執筆98年からは活動を一手に引き継いだ。当初は依頼に依って、自治体や民間団体の記念事業や勉強会などで不定期で披露していた。2007年ごろから新聞社や自治体、商工会議所などと共催する自主公演が加わり、今は年に数回、舞台に立っている。

シナリオは図書館やネットで調べたり、自治体や郷土史家に相談したり、基本的に1人でリサーチを重ねて執筆する。この土地はどんな景色を眺めてきたのか。住民の

心に響くエピソードは。真由美さん、バイオリニストの西村恵一さんとの共同作業。2人とチームを組んで20年が過ぎた。担い手の育成も進む。

昨年度は2期生15人が集まり、今春に発表会を開いた。50代から80代まで男女の区別なく、生き生きと取り組んでいる。

ただし公演がゴールではない。多くの人に地元の価値や魅力を再発見してもらい、次の一歩を一緒に踏み出すことだ。今後は言い換えるなど注意こそし、現代的な視点を重ね合わせて、街を再起動させる一翼を担いたい。

(くりもと・ともより)大阪ガスエネルギー・文化研究所 所長(研究員)